
恋する魔法をどうぞ！

桂木 景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する魔法をどうぞ！

【NZコード】

N8133D

【作者名】

桂木 景

【あらすじ】

無表情・無愛想・冷血漢の最悪三拍子が揃った主人公。どこか抜けてるワケあり天使。彼らの日常をご覧下さい。

第一話 占い少女は天使さん？！（前書き）

本作品、執筆にご協力頂きましたnekomate様、主人公の参考にさせて頂きました友人Hに多大な感謝をしております。

第一話 占い少女は天使さん？！

冬、雪舞う2月。俺は憂鬱な曇り空を見上げながら繁華街を歩いた。寒い中、手を取り合う男女は別の意味で暖かそうであつた。そんな中、廃ビルの前に手相占いをしている少女がいた。そんな怪しげな商売人でも冬の寒さには負けるだろうと腹をくくっていたのに、少女は平然と客待ちをしている。余程、金に困っているのだろう。色々考えを巡らせていると少女は俺の視線に気づいたようで笑いかけてきた。

「お悩みの様ですね。占つて差し上げましょうか？」

同情から来た行動だつたと思う。バイトの収入で比較的財布が暖かかった俺は、少女の目の前に座つた。普通、こういうのは少なからず通行人の目を引く物であるが、不思議なことに誰もこちらを観なかつた。

「何についてお悩みですか？」

「あんた。」

「え？」

そりや、いきなり初対面の人間にそんなことを言われたら驚くのも当たり前だろう。俺としたことが浅はかな考えだつた。

「こんな寒い時期に何で占いなんかやつてるんどうううつて考えた。」

スグに表情を変えて笑いながら返事をしてきた。ポーカーフェイスは職業柄、得意と言うわけだ。

「たくさんの人人の悩みを聞いてきましたが、あなたの様な人は初めてですよ。」

当たり前だ。こんな奴は俺くらいしかいだろう。

「私はですねえ、占いを趣味でやつてるんですよ。」

「趣味？」

俺は彼女の考えがイマイチよく分からなかつた。

「はい。皆さん様々な悩みを抱えていらっしゃいます。それを私のアドバイスで楽に出来ることに喜びを感じているんです。なので、占いは名ばかりで正しくは悩み相談と言つたところでしょうか？」笑みを崩さず、机に上に置かれている角材をそつと触れている。

「その年で凄い趣味を持っているんだな。いくらだ？」

「代金は頂けませんよ。」

驚いたように手を振つている。こんな少女でも中身はしつかりしているようだ。

「悩みを解決して貰つたんだ。礼をするのが道理つていうものだろう。」

占い何て今回が初めてで相場なんて全く知らなかつた俺は500円札を老いて立ち上がつた。少女は静止の声を掛けてくるが知つたこつちゃ無い。人の群れに紛れ込んでしまえばそれまでだ。

俺は妙な気分に浸りながら、繁華街を抜け駅に出た。

「遅いよ、大輝。」

女性達の眼を惹いていた男が俺の方に歩み寄つてきた。コイツは俺と同じ市内の私立高校に通う1年で、小学校からの知り合いだ。自分で言つのも何だが、俺は無愛想なタチで友人なんか作ろうと思つたこともないのに、コイツは無駄に絡んでくる。

「週一回しかないこの貴重な休みをどうしてお前に付き合わねばならんのだ？」

「ブラックジャックで負けた罰ゲーム」

そう、昨日学校で敗者は勝者の言つことを一回だけ、何でも実行するというルールで勝負することになつた。俺はKと9、2のカードを所持し、絶対的な勝利を確信していたのにも関わらず、友樹はジャックエースとAの最強無敵・ブラックジャックの役を出して勝利したのだ。その後、家で病んだのは秘密だ――

「くつ……。」

言ひ返すことが出来ず苦虫を噛んだ表情をしている俺を見て、満

足そうに笑う友樹。女性達の黄色い声なんて俺は聞こえていないうち。

「ゲーセンでも行くか。」

「ゲーセンなんて一人で行けよ。俺はいなくても大丈夫だろ。」

チツチツチツと指を振る。キザっぽいのは大嫌いだ。

「大輝は大いに輝くお守りとして機能するのだよ。」

「人の名前を勝手にいじくるなよ。それにお守りってどういう意味だ？」

「愚問だね。待っている間に何人の女性から声を掛けられたことが…。大輝はいれば僕に声が掛かる率がぐーんと減るのさ。君に流れるからね。」

「あ？俺に流れる？何の話をしているんだ？」

「お前に声が掛かるのは分かるんだが、どうして俺なんだ？」

「自覚みたいだね。大輝は地味な格好してるけど、かなりのイケメンなんだよなあ。その曲がった性格をなんとかすれば絶対に彼女ができるよ。」

「女を取つ替えひつかえしてるような奴に言われても説得力が無いな。」

「そんなことよりもこの状況はまずいね。さつさと移動しようか？」
友樹との会話に白熱してしまつとは俺としたことが…。駅前の広場にいる俺たちは地理的好条件もあってた、アイドルの撮影会よろしく多数の女性達に囲まれて写真を撮られていた。この包囲網の突破が容易ではないことは昔からの経験で熟知している。比較的人が少ないポイントを狙い俺は単身特攻をすることにした。彼女らの狙いは友樹。囮になつて貰おう。

「助け…。ぎやあああ。」

力の均衡が崩れると獲物を狙うライオンのごとき勢いで殺到する女性達。罰ゲームで俺に友樹が科したのは”明日、1時に駅にくること”なので、助ける義理も義務もない。明日学校でネチネチ文句を言つても俺は約束を守つたんだから無問題。……帰ろ。

俺の家は繁華街から少し遠い住宅地にある。両親は会社を経営していく海外にいる。んでもって兄弟もいないので俺一人というわけだ。毎月、高校の授業料と生活費を振り込んでくれてるのでなに不自由なく生活していっている。

そんな矢先、俺の家の前には見慣れぬ人影。「近所さんでもなさうだし…。ゲッ、占いしていた少女がなんでも？！」

「待つてました。」

「待つてただと？！」

「な、なんで俺の家を知ってるんだ？！」

人生で一度有るか無いかの不思議体験。どもるのは当然だよ、諸君。

「外でお話してもアレなんで中に入りましょうよ。長くなると思いますし。」

アレってなんだよ。アレって…しかも自分の家みたいに言うなよ。俺の家だぞ、ここは。

俺は少女から放たれる見えない重圧に逆らひ「とは出来ず渋々、渋々家の中に招き入れた。

「男性の一人暮らしつて…。グチャーッとしてて、『ゴッキー』田撃なんて日常の1コマだと思つてたんですけど、案外キレイなんですね。」

「何気なくすんご」と言つてないか？お前。

「いつの時代の話だよ。男でもそんな家になんざ住みたくないねえよ。」

「ほへへ。」

聞いているのかどうか分からぬ曖昧な返事。腹立つてきた。

「で、何に用だ？」

「そうでした！！私は下級天使のシルフィリアです。階級を上げるのに善行をしなければならぬ、下界に降りて占いをしていましたのですがあまり善行が出来なくて困っていたのです。そこにたまたまあなたが通りかかり、かなりお悩みのようだったので解決しようと家の前で待つていたのです。」

はあ？ 天使？ 階級？ 善行して階級上げ？ 警察に頭のおかしい少女が家にいるつて通報しようつかな？

「私の頭は正常です！」

机をバンッと叩き、肩を怒らせて言つシルフィリア。つーか人の思考を読むなよ。

「私のことはシルフィーで構いません。それと作者が都合上、思考を読ませました。」

う～む、作者よ。後でたっぷりとお仕置きをしたやるからな。

「お前…ああ、シルフィーの目的は分かつた。だが、何で俺なんだ？」

「恋に関する悩みを大輝さんが抱えていらっしゃるからです。解決すると善行ポイントが大幅に加算され、上級天使にまで飛び級出来る上に、”恋のキュー・ピット”の称号まで手に入るんです！！それにこの悩みは私にしか解決できません。」

最後の言葉はよく分からなかつたが、コイツは自分の野望のために動いているのがよーく分かつた。

「俺には不利益になることはなさそうだし…。」

「では、了承していただけるんですね？ 良かったあ～。4日ぶりに暖かいフカフカのベットで寝ることができます。」

「待て、ここに住むつもりか？」

「そうですけど？」

「許さんぞ！～！」

「魔法で大輝さんの事は調べてあります。それに私、見かけより生きてますよ？」

なるほど、魔法を使つたから家の位置が分かつたのか。納得、納得。つて

「魔法が使えるなら何にも困らないだろ？ 出て行け。」

「私が下級天使と言うこともありますが、下界での魔法使用は結構制限されているんですよ。それに物理的なことは出来ても精神に入するようなこととかは無理です。」

「不便なんだな。」

「と、言つわけでお母様の寝室をお借りします。隣の部屋だからと言つて変なことはしないで下さこね。」

「誰がするか！――」

今日は厄日だ。こんな天使が降りることを許可した神よー俺は絶対に許さないぞ！

そう言えば作者のお仕置きがまだだったな。うひひ

風通の住宅にはない防音の地下室に連れ込まれた作者は……その夜、イイ声が家の中に響き渡つた。

第一話 占い少女は天使さん？！（後書き）

本格的なラブコメは初めてです。つなたい文章ですが最後までおつき合い頂けるよう、心からお願い申し上げます。

なお、タイトルは仮題であります。小説ネタと同時にタイトルを募集しております。

普段は目覚ましの音で目が覚めるのだが、今日は違った。体に重量を感じたのだ。読者諸君、目覚ましに起こされる不快さは「存知だろう。今はそれとまた違った不快さを体験している最中だ。なぜか? 目を開けたと同時にシリルフィーが馬乗りになっていたからだ。

「大輝さんつて以外に立派なんですね~。」

感心したように言うバカ天使。毎朝の生理現象だ。分からぬ女性諸君は永遠の謎として胸に閉まつていて頂きたい。それよりも……このバカ天使を殴り飛ばしたい。

「どけ、今は最高に不機嫌だ。」

人外の低温で警告したのにはさすがのバカ天使でも恐怖しただろう。「悪魔みたいで。」と言いながら素直におりた。

「起こして貰うには非常にありがたいのだが今度同じ事をしてみる。お仕置きだぞ。」

昨日、作者の泣き声を聞いていたのだろう。顔が引きつってブルブルと震え始めた。ちなみに何をしたのかは一切秘密だ。作者にでも聞いてくれ。

「朝ご飯出来てますよ。」

引きつった笑みも良い物だと一人笑つていると、いつの間にかシリルフィーはいなくなつていた。俺はさっさと着替えをすましてリビングに向かう。と、コーンスープとトーストが準備され美味そうな湯気をあげている。普段はパンをそのまま口に放り込んで済ますので、こういったまともな朝食は非常にありがたい。

「お前、料理できたんだな。」

「インスタントです。それにトースターにパンを放り込んだだけです。」

まだ怖がっているのかきつちの片隅から声がした。

「準備してくれるだけでもありがたい。」

取りあえず礼を言い、黙々と喰う俺をジーツと見つめ続けるシルフィー。じつに喰いづらい。

「俺の顔になにか付いてるか？」

顔を見つめ続けるなと言う意図が含まれていてそれをシルフィーは理解してくれただろうか？

「美味しそうでなによりです。」

と幸せそうに言わわれては、訂正する氣も失せた。

食器を片づけ時計を見ると大変ヤバイ時刻。俺は神速でカバンを取り、シルフィーを家に閉じこめるようにして施錠。後は神速で学校へ向かうだけ。ふと振り返るとニコニコ笑顔のシルフィーちゃん。激しくイヤな予感がした。

「私も学校へいきます。」

「却下じやボケ！！」

シルフィーの姿を教師共に見られたら俺はなんて言い訳すればいいんだ？

「大輝さん以外の人間には見えないようにしておきますので大丈夫です。」

時間がないと言うことも助長して承認してしまった。ハハハ……情けない。それでもなんとか遅刻せずに学校へ着いた俺は神速の走りをした副作用で全身から水蒸気を放出し、文字通り死んでいた。シルフィーはといえば人に当たらないよう、器用に動きながらちょこまかと教室を走り回って楽しそうだった。このまま何も起こらなければ、と祈る矢先。

「大輝さんの担任つてハゲですよね？」

と俺の耳元で囁いてきた。不幸中の幸い、一番後ろで窓際という特等席にいたお陰で周囲の奴らに聞かれることは無かつた。

「あれはカツラと言つて頭に乗せる飾り物だ。」

一応、人間ではないので丁寧に教えておく。

「そうですか…。少し窓を開けて貰えませんか？」

何がしたいのか理解できなかつた俺は下手に騒がれては困るので素直に窓を開けた。

ゴアツと突風が入り担任のカツラが……。嗚呼、悲しいかな、三月には定年を迎えるとしている担任はトラウマ並の悲劇。今まで一生懸命隠し通してきた”ハゲ”をクラス全員に見られてた。…教室の状況は”想像にお任せしよう”。

王道とは言え、やつてくれたなと思わずにはいられなかつた。当の本人は床をのたうち回つてはいる。俺は開放した窓をそつと閉めて、無表情に前を向く。担任は顔を恥ずかしさのあまり真っ赤にしてカツラを片手に飛び出した。

「昨日はよくも僕を置いて行つてくれたね。」

先ほどの件で涙目になりながらも鬼のような形相をしている友樹。

素晴らしく滑稽だ。

「約束は果たしたはずだが？」

「それはそうだけど……。親友を見捨てるのかい？」

「俺には友人はいない。お前は単なる知り合いだ。」

「知り合いでも良いから助けて欲しかつたよ。おかげでまた携帯変えなくちゃならなくなつたんだからね！」

「本当に残念に思つ。（棒読み）」

「どうせ本心からじやないでしょ？」

「当然だ。」

友樹の奴め、盛大に溜息をついていきやがつた。他人なんだから当たり前だろう？

「大輝さんにも親友がいたんですねえ。」

問題を引き起こしてくれたバカ天使は眼をキラキラさせてやがる。「さつきも言つただろ？ アイツは昔からの知り合いであつて他人である、からにして親友ではない。それに俺みたいな奴に誰も近寄ろうとはしないだろ？」

「客観的に見たら、そういうのって特異な親友って言つと思つんで

すけど…。」

「失礼な奴だな俺は…。」

前話の様な失敗を侵さないよとにと周囲に注意を払いつていたおかげで委員長の接近に気が付いた。

「林くん、一人で何か言つのはやめた方が良いわよ。大森くんとの関係は良く分かつたから。」

どうやら俺だけの声が聞こえていたらしい。干渉してくる委員長を華麗に無視して1時間目の準備をする。

「ハア、また無視？大森くんにはちゃんと話すのに…。」

やれやれと言いたげな表情で見下ろす委員長にむかついたが、過去の失敗を繰り返さないように我慢。

何言わない俺に飽きたのか溜息一つ残して去つていった。シルフィーはなにやらニヤニヤしながら手帳に書き込んでいた。とんでもなく恐ろしい事が起こりそうなキガして鳥肌が立つた。

「何をかいているんだ？」

厳重に周囲を観察しながら俺は問うた。

「大輝さんつて委員長のこと、好きなんでしょう？」

「ハア？！」

突然の問題発言に取り乱してしまった。結果、数人のクラスメートに俺の声を聞かれてしまった。

「絶対そうに決まつてます！！私、シルフィリアは全身全靈をもつてこの悩みを解決します！！」

一人、決意に燃えるバカ天使を放置して俺は授業が始まるのを待つた。

（委員長こと青木 優奈、視点）

私は密かな恋心を抱いている。ふんだんは無表情で無愛想で冷血漢で、クラスのみんなとの団体行動なんて絶対にしないけど、裏で色々支えてくれてる。文化祭の時だってみんな早々に帰つてしまつ

たのに大森くんと二人で準備を手伝ってくれた。他の女の子はおもしろくて明るい大森くんが好きって言つけれど、私は林くんが好きだ。

先金、私は自分の気持ちに気づいて、毎朝林くんに声を掛けて居るんだけど当の本人は無視を決め込んで返事をしてくれない。一応、男子から数回告白されてて自分の姿にはそれなりの自信があつたんだけどな……。でもわたしは絶対続けていつか必ず、この思いを告げるんだから！！

「……員長！！委員長つてば！！！」

「あつごめん。ボーッとして気づかなかつた。」

「大輝の観察も良いけど、もつと周囲に気を配つた方が良いよ。」

「そんな……観察だなんて……。」

「うわあ～～今絶対に顔を紅くなつてるよ。大森くんのバカバカバカ力！」

「委員長が大輝のこと好きつて分かるよ。何人もそういう子、見てきたし。それと一つ忠告。アイツはかなり鈍感だから積極的に行かないと気づいて貰えないよ？」

「うん……私に…出来るかな？今までこんな想いしたことなかつたから…。」

「大丈夫だよ～。委員長が努力を続けていたら絶対にアイツは変わるから。どんなことがあつても優しい愛で包んでやつてね。それじゃ、僕はこれで。」

「大森くん。」

「……ん？」

「その……ありがとう。」

なぜきあ一時間目の授業は始まるつて言つのに教室から彼は出て行つた。でも、大森くんに私の気持ちを知つて貰えてよかつたな。私を応援してくれるらしいから、何気なく私の気持ちを伝えてくれるかも？彼がわたしのキューピット？！神様ありがとう。ん？さつき出て行つたばかりなのにいつ席に戻つたんだろう？ま、

いい
か。

秘めた恋心（後書き）

今日は特別に下書きが進んだので更新しました。
普段は週末に更新します。
下書きが完結すれば、頻度もあがると思いますので期待していく下
さい。

第3話 ドキドキバレンタインデー

ん？今朝から男子諸君がそわそわしているが、何かあつたんだろ
うか？

『シルフィー、何か事件でもあつたのか？』

あ、ちなみにこの『』は俺とシルフィーの念話。つまりテレパシ
ーだ。それと、このバカ天使は”学校に連れて行かないと家を爆破
しちゃいます！”という、物騒な事言い始めたので泣く泣く連れて
行くことになった。

『大輝さん、思考が筒抜けです。それに今日はバレンタインデーだ
からだと思うんですが…』

『そう言えば毎年この時期にそいつた行事もあつたなあ。好きな
人にチョコをあげるなんて日本限定の行事なんだが…。』

『恋する乙女を一番強くするのがバレンタインデーなんです！！自
分が義理チョコ程度も貰えないからってこの神聖な日をバカにしな
いで下さい！！』

『お前サラッと世のモテない男性を敵に回すような発言したんだぞ。』

『念話は他人には決して聞こえません。大輝さんが散々頼み込んで
くるから仕方なしに契約して使えるようにしてあげたんですよ。』

『いや…読者の方々だつて…。』

『ヒイツ！！』

バカ天使シルフィリア嬢は何を見たのか恐怖の表情で消えてしま
つた。邪魔な奴が消えてスッキリした気分で登校できるぜ。つたく
バカ天使が言えに来てからというもの食事に関しては感謝している
んだが、ダラダラと夜遅くまでテレビを見てはしゃいだり、朝は変
な起こし方したり迷惑極まりない。そもそもだな、俺がこ…。

『朝から何難しそうな顔してるんだい？』

『別に…。色々考えてただけ。』

「チョコの個数とかでしょ？」

「バカなことを言つた。そんなアホらしい行事に付き合つてている暇はない。」

「珍しいね。毎年僕が言わないと覚えてないのに。さては氣になる女の子でもできたの？」

「いるわけねえだろ？ 僕は一生そういうものとは無縁なんだよ。」

「Mな子とかは大輝にメロメロだと思つんだけじ。」

「そいつは変態で俺には変態の趣味はねえ。よつて俺には女が寄りつかない。証明終わり。」

「やっぱ理系志望は考えが堅いね。」

「…そういうお前も理系だろ？」

「だね。それよりも、問題は靴箱を開ける時だよ？ 毎年のことなんだから分かつててるでしょ？」

俺は長年の付き合いから友樹の言いたいことを察知した。つまり、靴箱を開けた瞬間に流れ落ちるチョコをなんとかしなければならないのだ。ちなみに、なぜか毎年俺の靴箱に友樹宛のチョコが入っている。そして、他の男子の痛々しい視線と期待に満ちあふれる女子生徒諸君のまなざしも付いてくるのだ！

「一つも漏らさないように下にカバンを設置してはどうだ？」

「それ去年も一昨年もやつたよ。漏れて大変な事になつたの覚えてない？」

そう言えば落としたチョコをどっちが先に触るかで大変な騒ぎになつた。触れたチョコの持ち主はなぜか気絶したし、触れて貰えなかつた方はなぜか意識不明の重体で三日間病院に寝泊まりした。そんな事があつて校長とかに”へたに彼女たちの感情を揺すらないで欲しい”と中学時代に言われた。高校ではどう対応するのか楽しみではあるが、面倒なことになりそなうので言い解決方法を思案するか。

あれこれ考えていろいろうちに、とうとう魔の時が来てしまった。

「大輝は先にあけなよ。」

「イヤだ。お前が先に開けろ。」

「僕もイヤだよ。」

「……。」

「……。」

「なあ。」

「ん？」

「開けないってのはどうだ？ 今日一日は来客用のスリッパ履いて過

『せうぜ。』

「名案だね。」

『まず第一の試練はクリア。 続いて第二の試練が…。』

『何コレ？』（注：友樹

机の上には大量のチョコ、チョコ、チョコ…！ もちろん机の中にもギックリッシリ詰まっている。チョコに触れてしまつては死人が出そうな雰囲気が辺り一面に広がっていたので俺は隣の奴の机と交換した。登校してきたらこの奇怪な現象にぶつ倒れるだろうが、俺の身を守る犠牲だ。が…、男子諸君の視線が痛々しそう。無数の視線というナイフが幾重にも俺の精神を切り刻んでいく。痛い：痛いよ、ママ…。

『凄い量のチョコですねえ！ 大輝さんモテモテ』

頭を抱えて悩んでいた俺に救いの天使が光臨した。

『シルフィー頼む！ 友樹に行くはずのチョコがなぜか俺にまで回つてきているんだ！ 全部消してくれ！』

『何言つてるんですか。コレ全部大輝さん宛ぢやないですか？』

『毎年のことだから分かってるんだよ。友樹の机の上に乗りきらなかつた分が俺に来ているんだ！！』

『乙女の恋心をズタズタになんか出来ませんよ～。』

『この悩みを解決したら善行ポイントが加算されるんじやないのか？』

？』

『こんな小さな悩みでは善行ポイントなんて溜まりませんよ。魔法使うだけ無駄です。それに念話していると私の魔力が削られるんですよ?』

『関係ねええよ……さつやとこのチョコを消し……』

あ、あの野郎……。念話の接続を切りやがった(怒)

「林くん……。」

ふと顔を上げると委員長がいた。

「委員長も友樹田当てかよ。俺はそういうことはしないんだ。自分で渡してくれ。」

なんで俺が友樹のチョコを渡さねばならんのだ。つたぐ、毎日、毎日声を掛けてくると思つたらこの田のための布石だったのかよ。

「私は大森くんじゃなくて……。」

「もういいって。朝から疲れてるからさ。どうかいってくんね?」

「……分かった。」

「これだけ冷たくあしらつておけば一度と俺に声を掛けてこないだろ?」

「大輝さんひどくないですか?」

いつの間にか背後にシルフィーがいた。さつきは忽然と姿を消していなかったのに。少しばかりその身勝手な行動について説教をしてやらねばならんな……。

「言い訳は聞きたくありません! 委員長の気持ちに気付いているんでしよう? !」

「友樹が好きで俺に近づいてくるんだろう? 分からない程俺はバカじゃない。」

「本気でそう思つてるんですか?」

「ああ、魔法で何でも使って俺の心を覗いてみろよ・

「人の精神に入れる魔法は使えないんですつて! 使えたら苦労しませんよ。」

「お前がいうセリフかよ。」

「誰か言うセリフなの?」

友樹が不信な目で俺を見てくる。

「モナ・リザに向かつて話すなんて…末期だね。」

「哀れみというか、絶望的というか複雑な表情で俺を見てきやがる。まあ、一般人にはバカ天使の姿が見えないので勘違いをするのも仕方がないことだ。と、問題の元凶はまたしてもいなくなつていて、マジでモナ・リザに話しかけていたのか…。」

「やめる。その事これ以上いうんじゃねえ…。」

「今モナ・リザが大輝に向かつてウインクしたよ?」

「重症だな。いい精神病院を紹介してやろうか?」

「僕より大輝が先に入院させられると思うんだけど。」

「あのバカ天使が来てからと言うもの、俺には悩みが絶えない…。」

第3話 ドキドキバレンタインター（後書き）

下書きは第1~0話でネタ切れ…。
ビハニマシヨウ…。

下手したら、終わりに掛けだしてしまつかもしれません。汗
皆様のアイデアを下さい。お願いしますm(—_—)mペコリ

第4話 夢鬱な休日

「休日ですよー！」

朝からハイテンションなバカ天使。日本中の高校生は昼頃まで安眠しているのに朝の5時に起こしやがった。普段はウザイの一言で終わらせるのだが、時間が時間だけにバカ天使にも処罰を科さねば…フフフフ。

「しょ、処罰なんて、て、て、て、天使にしても良いと思つてるんですか。」

俺の思考を読んだのか、声が震え後退し始めた。

『さらに思考まで読むことはコレは重罪だな。』

わざと念話でバカ天使を追い込む。当の本人は顔面蒼白で十字を切りなにやらブツブツ祈つてはいる。が、今さら神に祈つたところで俺の怒りが収まるはずもなく、防音処理を施した地下室に連れて行き閉じこめた。中は完全な暗闇で逃げ場などなく、本やで見つけた魔法封じの魔法陣・呪符などを貼り付けておいたので魔法対策も力ンペキ。後は一度寝するだけ。

携帯の着信音で起きた音は時計を見た。13:00、ふむ起きた時間だな。

「何だ？」

「今からカラオケ行こうよ。」

「嫌だ。」

「昼夜は僕がご馳走するよ。」

「場所を言え、すぐに行く。」

一人暮らしの俺は、妙に貧乏性の俺は”タダ・無料・特売日”に弱いのだ。おつと、今朝閉じこめたバカ天使を開放しなければならんな。

「大丈夫か？」

「怖かつたです！！」

「なら一度と休日の安眠を妨害しないことだな。それと俺は今から出かけるから留守番を頼む。メシは外で喰つてくるから用意しなくても良い。」

「分かりました。あまり遅くならないで下さいね。」

地下室から出てきたバカ天使は少女趣味の白いゴスロリドレスは呪符の影響で黒焦げになつていて、それはそれは見るも悲惨な状態だった。

「反魔の呪符の効力は絶大でした。」

そう言い残し自室へと消えた。多少やりすぎたとは思ったものの、普段の恨みを晴らせた爽快感が今の俺の心の大部分を占めていた。

「お、そうだメシ、メシ。」

さつさと行かなければメシにありつけないよつた気がしたので急いで向かう。

「昼メシ喰いにいこつぜ。」

「到着早々の人間が言うセリフかい？僕は大輝の財布じゃないんだからね。」

「寝起きだし軽くマックにでも行くか。」

お財布に優しく高カロリーな食事が出来るマックは学生の生命線とでも言うべき存在だろう。

「約束守つてね。」

渋々といった感じで俺が注文したメニューの料金を支払い、釘をさしていく。

「夜まで付き合つてやるから心配するな。」

「ご飯食べるまでの間違いでしょ！ 本当にお金のかかる人だな。」

「そう文句を言うなつて。」

「カラオケは僕たちだけじゃないからね。委員長と僕の彼女が来る。」

「

……。委員長とお前の彼女が一緒！？ 冗談じゃねえ。」

「何で余計な者まで付いてくるんだ？」

「以外に冷静だね。やつぱり男一人じゃ寂しいと思つて女の子を呼んでみたんだ。」

「お前の彼女はまだ分かるんだが、何で委員長なんだ？」「他の子に電話してみたんだけど繋がらなくてさ。唯一繋がったのが委員長だったんだよ。」

あ、あの野郎…。中でそういうことをしてやがったのか。やつてくれるんじゃねえか。

「そ、そ…うか…、仕方ないな。」

「何怒つてるの？」

「誰も怒つたりしてないじゃないか。」

満面の笑みで返したのに勘違いされたようだ。

「イヤ、イヤ、イヤ。人殺せますよ、その顔。」

失礼なことに友樹のやつはガタガタ震え出すわ、ガラの悪いお兄ちゃん達も下を向きながらお帰りになられた。まあいいさ、後でたつぷりとバカ天使にお仕置きをしてやるからな。

「何に対しても怒つてるアホら分からぬいけど、取りあえず時間だから店に行こうか？」

「そうだな。」

激しい怒りを後の楽しみの為に置いて、気持ちの切り替えが大切だ。今は夜に食う飯のメニューでも考えておこう。

色々美味しそうな想像に浸つていると目的地が見えてきた。店の前には女の子二人が楽しそうに笑っていた。

「早かつたんだね。」

「友樹遅いよ。女の子待たすなんてサイテー。」

「待ち合わせの時間には間に合つてるんだから無効だよ。」

「ハルカもそんなんい怒らない。大森くん困つてるよ。」

「優奈が言うなら…友樹、今回だけだからね…」

「ハイハイ。んじや、入ろうか。」

「その前にやることが一つあるんじゃないの？」

「え？」

「え、じゃないわよ。コッチの男、誰だよ。」

「ああ、僕の小学校からの親友で林 大輝。彼女は僕と付き合って
る合田 ハルカ。」

「小学校からの知り合いだ。」

「ブツ……アハハハハ。友樹、林くんってコーモアあるね。」

ふん。友樹の彼女と言うから待機して会つてみたらこの様かよ。
俺なら願い下げの下品な女だ。メシがかかつてなきや帰つてるとこ
なんだがな。

「ハルカ、その位にしどきなよ。わ、入るつ。」

6時間というかなり長い時間を頼んでいた。そりや覚悟はしてい
たが実際になるとかなりツラく感じる。

「さあ、歌うぞおーーー！」

まあ女の子は歌に燃えるのは理解できるんだが断りもなく一曲目
を入れるって自己中すぎるだろ。

まあ、そんな調子で”ハルカの一人ライブ”は2時間におよんだ。

「私はもういいわ。流石に痺れた。」

当たり前だろ！ バカヤロー！

「僕、いっていいかな？」

友樹は遠慮がちに尋ねてきた。もちろんOK。始めから俺は歌う
気なんてないからな。オイ、部屋代無駄とか言つな！ ディナーで
きつちりと還元させてもらうんだよ！

残りの4時間は委員長と友樹が熱唱して終了。俺はメシをおごら
せて帰宅。いやー喰つた、喰つた。でも、なんか無駄に体力使つ
日だったな。

ああ、そうそう。あのバカ天使が見ていないところで何かしない
ように魔法をかけておいた。これからもっと迷惑すると思つが保険
だ。気持ちを察してくれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8133d/>

恋する魔法をどうぞ！

2010年10月9日01時38分発行